

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 🏢 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

## [2a1103-05] 生涯スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「多様化するスポーツ」の価値を再考する—子どものスポーツの未来—

コーディネーター:中野 貴博(中京大学)

日本の出生数は約15年前から3分の2に減少している一方で、「運動している子ども」の割合は変化していない。そのため、実際に運動やスポーツをしている子どもの数はどんどん減少している現状にある。また、働く母親の増加、手軽に楽しめるスクリーンデバイスの普及など、子どもを取り巻く環境や社会情勢はここ数十年で変化している。それに伴い、子どもや保護者の運動・スポーツに対するニーズや価値観も多様化してきていることがうかがわれる。

従来と同じアプローチに反応してスポーツをする層だけを集めていては、これ以上のスポーツ人口の増大は見込めないかもしれない。例えば、種目ごとにあるスポーツ協会は、それぞれの種目の競技人口を増やすことに依然として目を向けすぎではないだろうか。運動・スポーツの指導者や関係者は、自身が子どもの頃と同じように子どもがいるという感覚は改め、少ないスポーツをする子どもたちを取り合うのではなく、新たなニーズや価値観をもつ層を取り込むための視点や取り組みが必要である。

「多様化するスポーツ」とは、スポーツをする場所（学校、地域、スポーツクラブ、オンラインなど）や楽しみ方（価値観、参加スタイルなど）が多様になり、子どもが自分に合った形でスポーツを楽しめる選択肢が生まれつつある状況を指す。こうした多様な機会を生かし、より幅広い子どもたちがスポーツにアクセスできる環境を整えていくことが、今まで届かなかった子どもたちにもスポーツの魅力を伝え、スポーツ人口を拡大するために欠かせない視点ではないだろうか。

本シンポジウムでは、特に幼児期や児童期の子どもにフォーカスを当て、少子化時代に多様なスポーツの機会、価値を子どもに届け、スポーツ人口を増やすにはどうすればよいのか？様々な立場のシンポジストの具体的な取り組みやアイデアを共有し、生涯スポーツ社会の実現に向けた子どものスポーツの未来について考える。

[生涯スポーツ-SA-1]

子どもの運動を支える「親子の三間」

家庭と地域の実態とその展望

\*香村 恵介<sup>1</sup> (1. 名城大学)

[生涯スポーツ-SA-2]

なぜランニングの授業は不人気で、生涯スポーツにつながらないか

\*佐藤 善人<sup>1</sup> (1. 椋山女学園大学)

[生涯スポーツ-SA-3]

スポーツの原点に立ち返る

遊びを通じた地域クラブの取り組み

\*永田 厚<sup>1</sup> (1. 特定非営利活動法人スポーツコミュニティ磐田・ポーラスター)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

**[2a1103-05] 生涯スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「多様化するスポーツ」の価値を再考する—子どものスポーツの未来—**

コーディネーター:中野 貴博(中京大学)

**[生涯スポーツ-SA-1] 子どもの運動を支える「親子の三間」  
家庭と地域の実態とその展望**\*香村 恵介<sup>1</sup> (1. 名城大学)

## &lt;演者略歴&gt;

2008年に岐阜県スポーツ科学トレーニングセンターで測定業務専門職員、2014年より京都文教短期大学で幼児教育に携わる。2015年、同志社大学大学院スポーツ健康科学研究科を修了（博士：スポーツ健康科学）。2018年に静岡産業大学講師を経て、2020年より名城大学農学部および大学院総合学術研究科にて准教授を務めている。

子どもの身体活動をめぐる環境は、この20年で大きく変化している。かつては放課後や休日に友達と自由に遊ぶ姿が一般的だったが、現在は幼児の約半数が平日に園外で外遊びをまったく行っておらず、小学生でも高学年女子を中心に外遊びをしない子どもが3～4割を占めている。一方で、習い事の参加率は上昇しており、2019年時点で小学生の約8割が何らかの習い事を行っている。自由に遊ぶ時間は減り、費用をかけて運動機会を得る構造が広がっている。筆者が関わった笹川スポーツ財団の調査では、世帯年収が低いほど運動系の習い事をしていない幼児の割合が高く、年長児では高所得層と低所得層の間に40ポイントを超える差が確認された。運動習慣の獲得が家庭の経済状況に左右される実態が明らかになっている。

このような子どもの現状の背景には、「親子の三間」（時間・空間・仲間）のあり方が関係している。同調査では、親子で体を動かす頻度が高い家庭ほど幼児の運動時間が長く、「親子でまったく体を動かさない」家庭に比べ、「ほとんど毎日」遊ぶ家庭では週あたり7.5時間の差があった。また、両親とも週1回以上運動している家庭では、そうでない家庭よりも運動時間が約1.2時間長い。さらに、保護者同士のつながりがある家庭の子どもほど、運動時間が長い傾向も示されている。

本発表では、こうした調査結果をもとに、子どもの運動習慣を支えるために必要な視点として、①保護者の時間確保と意識啓発、②家族と一緒に、または自宅でも体を動かせる環境の整備、③地域コミュニティや仲間づくりの支援、という三つの柱を提案する。それぞれの柱に対応する実践として、大学での学生向け授業プログラム、親子で参加できるスポーツ環境や動画を活用したアクティブなスクリーンタイム、公民館を活用した親子や異年齢の運動遊びによる交流機会などを紹介し、「親子の三間」を支える取り組みの方向性を考察する。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

## [2a1103-05] 生涯スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「多様化するスポーツ」の価値を再考する一子どものスポーツの未来ー

コーディネーター:中野 貴博(中京大学)

### [生涯スポーツ-SA-2] なぜランニングの授業は不人気で、生涯スポーツにつながらないか

\*佐藤 善人<sup>1</sup> (1. 椋山女学園大学)

#### <演者略歴>

小中学校教員(1995年～)、岐阜聖徳学園大学(2008年～)、東京学芸大学(2016年～)、2025年より椋山女学園大学教育学部教授。博士(学校教育学)。主な著書に、持久走・長距離走の授業革命ー「つらいだけ」から「楽しい」への実践アイデア(2025年)、スポーツと君たちー10代のためのスポーツ教養(2019年)がある。2021年ランニング学会賞受賞。

体育授業は、子どもの豊かなスポーツライフの実現に寄与することが目指されている。小学校から高等学校まで必修であり、実に多くの時間をかけて運動・スポーツの学習を実施している。しかしながら、少なくない数の体育嫌い・運動嫌いを生んでいることは現実であるし、その代表格は持久走・長距離走(以下、ランニング)の授業である。この状況は改善されるべきであるが、一向にその兆しは見えず、ランニングの授業自体が豊かなスポーツライフの一場面とはなっていないと思われる。この状況を生み出している責任を教師や子どもといった個人に見出そうとするならば、問題を改善することは難しいであろう。

アイリス・マリオン・ヤング(2022)は、社会における不正義を改革するには、自己責任から政治責任へ目を向ける必要性があると訴えている。また、2025年はじめに放送されたTBS系ドラマ「御上先生」において、主人公の教師が「The personal is political」(個人的なことは政治的なこと)を用いて話題となった。ランニング嫌いを生んでいる体育授業の責任は、教師や子ども個人にあるのではなく、ランニングを取り巻く政治や社会の構造にあるとは言えないだろうか。

例えば、小学校学習指導要領解説体育編(2018)には、体づくり運動に「かけ足」あるいは「持久走」としてランニングは位置づいている。すなわち、「ランニング＝体力向上の手段」であり、その魅力を味わわせにくい状況をつくり出している。あるいはメディアはトップアスリートスポーツとしてのランニングを報道する。これらは「ランニング＝速さ(苦しさ)」といったステレオタイプを社会全体に浸透させており、その状況が、速く走らせること/走ることを、教師/子どもに強要しているとは考えられないだろうか。

一人でも多くの子どもが運動・スポーツを楽しみ、豊かなスポーツライフを実現することを目指して、体育授業におけるランニングの現状を契機として考えてみたい。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

## [2a1103-05] 生涯スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「多様化するスポーツ」の価値を再考する—子どものスポーツの未来—

コーディネーター:中野 貴博(中京大学)

### [生涯スポーツ-SA-3] スポーツの原点に立ち返る

遊びを通じた地域クラブの取り組み

\*永田 厚<sup>1</sup> (1. 特定非営利活動法人スポーツコミュニティ磐田・ポーラスター)

#### ＜演者略歴＞

1990年学生時代にサッカースポーツ少年団ボランティアをはじめ、1994年より故郷である磐田市にてサッカークラブの指導を継続。2006年サッカークラブをNPO法人化しクラブマネージャーとして勤務。日本サッカー協会公認B級コーチ、フットサルC級コーチ、磐田サッカー協会技術副部長。

近年、スポーツクラブへの加入率が減少傾向にある。私たちのクラブでも、この5年間で約30%の減少が見られた。全国的にも、小学校5・6年生の加入率が大きく減少しているというデータ（2022年 笹川スポーツ財団）がある。背景には、学校部活動の地域移行により学校での活動機会が減ったことがあるが、民間や地域クラブへの流入も想定ほど伸びておらず、全体として競技人口が減少している。

もう一つの要因として、子どもや保護者のスポーツに対する価値観の変化が挙げられる。従来の「勝ちたい」「上手くなりたい」といった競技志向から、「楽しい」「仲間と関わりたい」といった楽しさやつながりを重視する傾向に移行していると感じている。

そこで私たちは、スポーツをもっと気軽に、誰でも楽しめる「遊び」のようなものにしたいと考え、遊びの要素を取り入れた「サッカーあそびスクール」や「親子deボルビ」といったプログラムを実施している。また、幼稚園や保育園を訪問し、保育時間内に「リーベ式運動あそび」や「出前サッカーあそび」も展開している。

これらの活動により、運動が苦手だったり内向的だったりする子どもがクラブに参加し、ボール遊びやスポーツの楽しさを体感している。一方で、運動が得意になった子どもが、より競技性の高い環境を求めてクラブを移るという傾向も見られる。

こうした状況から、「競技を本格的にやりたい層」と「楽しむことを重視する層」との二極化が進んでいるのではないかと感じている。そしてその背景には、「苦しいことを乗り越えることが競技力向上につながる」とする社会的な価値観も影響していると考えられる。

私たちは、幼少期には親子や仲間と気軽にスポーツを楽しみ、その過程で「もっと上手になりたい」「競技に挑戦したい」という自然な欲求が育まれることが、結果として持続的な競技力向上につながることを示していきたい。